

[書 評]

子どもの「破る力」と子どもという媒介者

重 信 幸 彦

（東京理科大学・非常勤）

本稿は、2020年7月16日に実施された、菊地 暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ』『北白川子ども風土記』から』（小さ子社2020）の第四回目オンライン書評セッション「学校教育と郷土資源」にコメンテータとして参加させていただいた際の手控えをもとに、当日の議論をふまえ原稿化した、とりとめのない感想である。

まず、セッションでプレゼンされた石神氏と高木氏が『学校で地域を紡ぐ』に寄せた論考と、当日の両氏の報告に触れて刺激された点を述べ、それに基づき「学校教育と郷土資源」というテーマそしてこのプロジェクトの成果を通して私が考えさせられたことを述べていく。

「概念くだき」と「評言」の創造性から

石神論文は、戦後社会科という科目のなかで、当初考古学がどのような可能性を持っていたかを、「北白川子ども風土記」と、1950年代という多様な文化実践の時代を共有する、和島誠一を中心に地域住民主体で実施された岡山の「月の輪古墳」発掘の例を通して論じている〔『学校で地域を紡ぐ』pp.248-251〕。

月の輪古墳の発掘には、参加した子供達による「綴り方」が残されているという。それにもとづき、物質資料／モノを通して歴史を問う可能性を持った考古学が、歴史教育において「概念くだき」の武器になるとした和島

の主張を紹介し、石神論文は当時の郷土教育の実践が持ちえた可能性を論じる。「概念くだき」は、大人の抽象的な四角い漢字言葉による概念を、子どもたちが綴る日常の経験にねざした丸いことばを媒介にして捉え直す可能性を問うた「生活綴り方」が生み出したキーワードの一つでもあった。

石神論文は、「北白川子ども風土記」の子どもによるいわゆる「調べ事体験の綴り方」が、戦後の歴史教育のなかでどのような位置にあるのかをマクロな視点で、明らかにした。

一方、高木論文は、「北白川子ども風土記」の子どもの作文に、よりミクロに、いわゆるナラトロジーのテキスト分析を援用し分析してみせる。

作文のなかに刻まれた、様々なレベルでの「評言」（コメント）の痕跡に着目し、語る者とそれを聞き綴る者、それぞれが、自らの感情や思いなどを含めた表現をするなかで、知識の新たな解釈や更新がなされ、「伝える」と自体が創造のプロセスであることを可視化することに成功している。

高木氏は論考で、「聞く（キク）」とは、普通考えられているような受動的なものではなくもっと働きかける意味を持っていることを指摘しており〔『学校で地域を紡ぐ』p.276〕、「伝える」「伝わる」過程は、受け手の想像力が介入する、より積極的な意味で不透明な過程ということになる。

子どもの「破る力」 越境／侵犯する力

両氏の議論を重ね合わせると、改めて歴史を発掘する実践や作文という実践に関わった「子ども」という存在が浮かびあがってくるように思う。もちろん、その子どもは第四回目のセッションのテーマの一つでもある「学校教育」との関りのなかで現れるが、少し学校という制度と切り離して考えてみたい。

学校を前景化するとどうしても、「先生が、何をしたか／しうるか」とか、「学校は、何が可能か」といった「先生」や「学校」が主語になった議論になりがちである。しかし、この「北白川こども風土記」の可能性は、子どもが、先生のふるまいや制度としての学校の客体として位置づけられるだけでは、見えてこない部分もあるのではないだろうか。

「北白川こども風土記」を導きに展開した『学校で地域を紡ぐ』や、これまで三回実施されてきた書評セッションを通して、私は、子どもが持つ「破る力」とでもいう「子どもの力」について考えていた。特に、仲間同士で群れて行動するとき、それは発揮される。その力の見え方として二種類あるように思う。一つは、「越境する力」と名付けうるような、創造的な可能性を持つもの、もう一つは、「侵犯する力」とでもいうべき、ともするとやや暴力的なものとして現れる力である。

児童心理学などでいう、小学校の中学年前後で群れをつくり仲間同士で行動するようになることをさす、いわゆる「ギャンググループ」「ギャングエイジ」と名付けられた事象も、社会の側からそうした子どもたちのありようを見れば、こうした「破る力」として現れるのではないだろうか。

ただしこの「越境する力」と「侵犯する力」の二つは、エッセンシャルな違いというより、子どもたちとの関係性の作り方や在り方で、前者にも見えれば後者にも見える、関係性によりその現れかたが異なってくるものと考えておきたい。

越境する力

今回の『学校で地域を紡ぐ』をめぐる議論には、石神氏が取り上げた子どもが関わる郷土教育の実践や、高木氏が論じた子どもが刻む「評言」の創造性という議論以外にも、子どもの「越境する力」をめぐる重要なエピソードがあった。記憶に残っているものをあげてみたい。

黒岩康博氏による、第3章「〈先生たち〉〈おじさんたち〉の地域の歴史」は印象的に、子どもたちの「調べ事」に巻き込まれていった地域の大人たちを論じている。梅棹忠夫の「大学族（学者・サラリーマン）」と「花売り（近郊農家）」が「相互に無関係に並行して存在」し「大人たちはたがいに関係がないけれど、子どもたちは同級生だ」という指摘をうけて、「現地の社会構造を乗り越えた」成果であった、としている〔前掲書 pp. 234-35〕。社会構造を「乗り越えた」ということに、子どもの「越境する力」が現れているのではないだろうか。

また黒岩氏は、大学教員や、地元の住職などの知識人、そして「古老」といえるような人たちなど、北白川に、それなりに知的な土壌が存在していたことを論じている。

この「古老」について考えてみよう。ここに“そのことならあの人に聴け”と言われるような老人がいる。しかしその老人は、実際に誰かに問われて初めて「古老」になる、つまり応答により成立する関係性のなかに存在しているのではないだろうか。ある人が「古老」として生きるには、そこに越境してきて問いかける存在が不可欠なはずなのである。地域に生きる老人は、呼びかけられ問われて、初めて「古老」すなわち、「郷土資源」になるということもできるだろう。「北白川こども風土記」は、子どもたちが、果敢に訪ね歩き、そして問うことで、大学の資料室が外部に開かれ、大学の先生の知が地域に還元され、そして老人が「古老」になった成果だともいえる。そこには子どもの「越境の力」がはた

らいているに違いない。場合によっては、仕掛けた側であったはずの大山先生もふくめ、大人たちが、子どもたちの「越境する力」に半ばふりまわされつつ、ここに結集させられていったようにも見えるのである。

北白川小学校の郷土室の成立過程を論じた村野正影氏の第一章「京都市立北白川小学校の郷土室」には、同校の教育施設の拡充や『北白川こども風土記』の出版に「育友会」というPTA的組織の活動が、大きな役割を果たしたというエピソードが出てくる〔前掲書 p.174〕。それは一見すると親たちの活動ではあるものの、子どもが地域の学校に通うことから、親が引っ張りだされて学校を拠点とした地域に関連する活動に参加することになったということもできるだろう。

同じような場の可能性は、池側隆之氏の「コラム 北白川小学校と「おやじの会」」にも見ることができる。かつて北白川小学校に存在していた「おやじの会」を復活し、もともと土地で生まれ育った「地生え（おばえ）」も、「入り人」も別なく、イベントをつくり上げた当事者の記録でもある。池側氏の「小学生の親という属性をとり払うと、とたんに縁を見出しにくくなる大人同士」が、知り合えたということばは、その実践の過程で媒介としての「子ども」という存在が不可欠であったことを示している。

高木史人氏は、論考のなかで、「児童文化」と「子ども文化」の区別についてふれ、教育のために大人が手段として子どもにあてがうものが「児童文化」であるのに対して、子どもが、大人が与えたものを自分なりに換骨奪胎して変えてしまうものが「子ども文化」だと、児童文化論における区別を紹介している〔前掲書 p.283-84〕。子どもがどう前傾姿勢になるかが、問題だということになる。

この考え方は、「学校教育」と「子ども」がなめらかに結びつくわけではないことをも意味している。北白川小学校の実践は、子どもたちを導いた大山先生の努力や、「地元

の歴史や社会の背景という要因があったことは確である一方で、やはり、前傾姿勢で、「越境する力」を発揮し、地元に関わり、大人を巻き込んだ子どもたちがあり、その呼びかけにより「郷土資源」が立ち上がってきたといえるのではないだろうか。

侵犯する力

次に、もう一方の、子どもの「侵犯する力」について、触れておく必要がある。先にいったように、これは、二種類の力があるというより、子どもをめぐる関係性のありようから、どちらにでもなると考えておきたい。

先に言及した黒岩氏の論考のなかに書き留められた、もう一つ興味深いエピソードがある。おそらく戦前期のことと思われるが、京大の先生は北白川に住んでも、地元の北白川校に子どもを通わせず、他校に通学させていた人もおり、大学人で北白川小学校に子どもを通わせていたのは、三人くらいだったという。そういう状況のなかで、地元の小学校をよくするには我々の子供を他校に通わせるべきではない、と言った京大の先生がいたというのである〔前掲書 p.236〕。

京都大学の教員の自意識としてとらえる以前に、新たにそこに住み着くことになった「新住人」と、そこで生まれ育った者との間に、シビアに存在していた「地元」に対するアイデンティティの差異を語るエピソードの一つでもあるといえる。

北白川という地が、近郊住宅地として変遷してきた歴史は、「新住人」が常にいるということを示しており、京大教員の例と程度は異なれ少なからずこうした「地元」に対する意識の差異を内包し続けてきたことを意味しているだろう。たとえば、地元の学校に子どもを通学させず、他所の私立などの学校に通わせる人たちにとって、地元の子どもの「越境する力」は、少なからずうるさくて厄介な「侵犯する力」になる可能性がある。

今回の『学校で地域を紡ぐ』には、実は、

この稀有な「地元」発掘プロジェクトをめぐる地域の温度差のようなものは、ほとんど語られていない。しかしそれは、学校という場で、子どもたちの力を媒介に「地域」がいかにかつがれうるかを問うたこのプロジェクトに対するものねだりになってしまうだろう。

まずは、「北白川こども風土記」をめぐるこのプロジェクトが、何よりも子どもの「越境する力」の豊かさを可視化していることを評価したい。

「地元」意識を持たない者として

しかし、私はどうしても、子どもの「越境する力」を、ややうるさい「侵犯する力」として見てしまう視線の存在にこだわってしまうのである。

こんなことをいうのは、実は私自身が、「地域を紡ぐ」ようなかたちで、一つの「地元」に関わったことがないからなのだろう。東京郊外の練馬に育ち、たまたま区内の教員養成大学の付属小学校に通ったため、地元小学校のPTAの下部組織であった子供会の報告はうちには届かなかった。結局、目の前の公園で開催された子ども会のイベントも、単にうるさいだけだという思いを物心つく頃から経験していた。クラスの友達の家も、近所に在るものではなく、バスで何十分も移動した先にあった。

結婚しても、特に子供は持たず、単身赴任で北九州に二十年弱居た頃は、小学校のすぐ隣に住んでいた。春秋の運動会は、決まって朝から子どもたちの声とスピーカーの大音響に悩まされた。甲高い声で実況中継をし続ける係りの子どもの声を聴き、きつと近所に居るにもかかわらず運動会を見に行けずに家事や仕事をしながら、この大音響の実況に耳を傾けている保護者もいるのだろう、と思っではみたものの、結局たえられずに少し音量を絞ってほしいと電話をしていた。

東京の今居る地は、住み始めて三十年近くたつが、「地元」との関りを求めもせず求め

られもせずに、地に足のつかぬまま時間が過ぎてしまった。子どもが居れば、PTAなどを通して、否が応でも「地元」に関わるきっかけが生まれ、また自分の子どもの「越境する力」により、つきあいが広がる可能性もあるのだろうが、もちろんそれは私にはない。とつ国からやってきた人々も少なからず住んでいるこの界限では、いつの頃からハロウィンなるものが行われだした。時期になると、変装をした子どもたちが群れをなして歩き回るのを見かけるようになった。ある時から、子どもたちが訪問してもよい家は、目印をだしてほしいという報告が町内会から回ってきた。トラブルが起きたのだという。楽しく仮装した子どもたちを「侵犯する力」として受けとめる者も居たのである。

うちでは、義母が居た頃は、菓子を準備していたが、義母が老人ホームに移ってからは、やめてしまった。

そんな私が、福岡県福岡市で、自治体史の民俗編を担当し、「聴き書き」をして地域の暮らしを豊かにする街の知恵などということを語ろうとすると、どこか嘘くさく、ありていにいえば、「街づくり美談」を、自分自身を棚上げにして語っているように思ってしまうのが忸怩たる悩みであり続けている。

二回目の書評セッション「リサーチアート論」の際に、谷本研、中村裕太両氏から、ツーリズムの可能性として、“ストレンジャーであるというアイデンティティの自己肯定を可能にする”という議論があり、とても印象に残っている。いわゆる「コミュニティ」が成り立っていく過程で、「世話人的な人が担うような街づくりの理想的な主体のありようや、「地元」への「正しい」参加の仕方にとらわれることなく、あえて根無し草でありながら、「地元」すなわち「郷土」のリアルを立ち上げ得るのか、それが、子どもの力がしばしば「侵犯する力」に見えてしまう私自身の課題なのである。

私が学んでいる民俗学は、そこに住む人々

が自ら問い考える学であるとともに、そこに（1931）第六章第六節〕。
やって来て「相逢うて話をするような機会」 あらためて、子どもたちのふるまいが豊かな「越境する力」として現れるには、何が
を持ち、その「土地を外の人に語りうるまで、 必要なのだろうか、と考えている。
知って出て行く」人のいわゆる「旅の学」で
もあった〔柳田國男『明治大正史世相篇』